

2024年12月15日 第二礼拝 アドベント第三主日 ～喜びの灯～

説教題「喜びの香油」イザヤ書61章1～3節／マタイ福音書5章4節

主任牧師 加藤

誠

「シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために」(イザヤ書61章3節)、「悲しんでいる人々は幸いである。その人たちは慰められる」(マタイ5:4)。

「悲しんでいる人々は幸いである」と主イエスは語られました。冗談じゃない。どうして悲しみ、涙している人が幸いなのでしょう。目の前で悲しみに打ちひしがれている人がいるときに、わたしはその人に向かって「幸いである」とはとても言えません。今から30年前、わたしは阪神淡路大震災の神戸にいました。一口に震災といっても、その被災は人それぞれでした。家が倒壊し、同じ部屋ですぐ隣に寝ていた妻を亡くされたYさんは長い間沈黙されたままでした。とても言葉を発せられる状態ではなかった。わたしはそのYさんを前に何も語るできませんでした。また今から13年前、東日本大震災で岩手県の大槌町に連盟の炊き出し支援で通いました。神戸で経験したことを何らか形で還元できたという思いがありました。けれども大槌町の避難所の安渡小学校の校庭で、腕組みをしながら海をにらみつけるように立っていた人たちにわたしはひと言も声をかけることはできませんでした。わたしはひと言も語る言葉を持ち合わせていませんでした。

今朝のマタイ5章の場面、主イエスの目の前にはさまざまな悲しみに打ちのめされた人たちが大勢いたことでしょう。しかし、その彼らに向けて主イエスは「幸いである」と語られたのです。どうしてか。わたしは主イエスには見えていたのだと思います。今悲しみに沈んでいる一人ひとりを、心の底から慰め支えてくださる神が共におられることが。その主イエスもまた孤独と絶望の中で涙を流し尽くし、悲しみを悲しみぬき、十字架で死んでいかれましたが、神はそのイエスを見放されませんでした。約束通りに、主イエスを墓の中から起こされ復活の命に生かされたのです。主イエスが十字架で無残にも殺される姿に涙していた人々に、聖霊を通して慰めと希望の息吹が吹き込まれていきました。イザヤが預言したように、主なる神さまは深い嘆きに沈んでいる一人ひとりに「嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまとわせ」てくださったのです(イザヤ61:3)。使徒パウロが語っているように、神は「慰めの源なる神」です(ローマ15:5)。この「慰めの源なる神」が今悲しんでいる一人ひとりに共なっておられることがはっきりと見えていたから、主イエスは「幸いである。大丈夫。あなたがたは必ず慰められる」と語る事ができたのです。

もう一つ、主イエスが見ることができていたもの。それは悲しみを経験した人だからこそ持ち得る「優しさや慰め」ではなかったかと思うのです。使徒パウロも次のように語っています。「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます」（第二コリント 1：4）。苦難を通して神の慰めを経験したあなたたちだからこそ、悲しみと苦難の中にある人の傍らに立つことができる。なぜなら慰めの源なる神が慰めを備えて共に歩んでくださるからだ」とパウロは語ったのでした。

これも阪神淡路大震災の時のことですが、当時わたしは神戸教会にいて、大阪から野中宏樹牧師がたびたび支援に駆けつけてきてくれたのですが、ある夏、高校を退学になった九州の若者が野中牧師のところに来ていて、彼を神戸の仮設住宅支援活動に連れてきたのです。「こんな自分にできることがあるのだろうか」と不安がっていた彼でしたが、被災された方たちの優しさに触れて笑顔を取り戻していきます。金髪に頭を染めていた彼に、90歳になる在日のオモニが「あんた何人？大丈夫やで。国籍が違っても生きていけるで！」と語りかけてくれました。そのオモニは13歳で日本に来て、さまざまな差別の厳しさの中を生き抜いてきた方です。悲しみを経験してきたオモニだから持ち合わせている優しさ。アモス・オズというイスラエル人作家は大江健三郎との往復書簡でこう語っています。「孤独の足し算は不思議なもので、一プラス一は孤独の二倍ではなく、おそらく半分です。一人の人間の痛みがもう一人と結ばれると、時には痛みが癒やされることさえあります。」

一人の人間の痛みがもう一人と結ばれるとき、そこに癒しが起こる。今朝のマタイ 5：4も「悲しむ人びと」になっています。ここで主イエスは「悲しんでいる一人」ではなく「悲しんでいる人びと」に語られたのです。主イエスの目の前にいた人びとの悲しみというものは決して同じ悲しみではなかったはずですが、一人の悲しみがもう一人の悲しみと結ばれていくとき、そこに癒しが起こっていく。例えば、震災で被災したり、差別を受けてきた人たちは「可哀そうな人」ではない。むしろ、他の人が知らない優しさを持ち合わせていて、他の誰かを慰めることのできる人たち。その「人びと」に向かって主イエスは「あなたがたは慰められる」と語りかけられたのです。

イエス・キリストが私たちの間に生まれてくださり、世界は変えられました。世界には相変わらず毎日悲惨が満ちていたとしても、人間のあらゆる悲しみを受けてくださった十字架の主がこの世界を私たちと共に歩んでくださるからです。主イエスは、私たちが心の底から慰め支えてくださる神が確かに共にいてくださることを教えてくださいます。そして一人の悲しみがもう一人の悲しみと結びつけられていく中に、慰め

の源なる神が確かに働いてくださることを教えてください。慰めの源なる神は、私たちの悲しみと嘆きを必ず喜びの香油と賛美の衣に変えてくださる。この主イエスが私たちの間に生まれてくださって世界は変えられた。慰めの源なる神が今日世界のあらゆる悲しみにある人びとに慰めを届けてくださることを祈っていきましょう。